

2016年7月、天理教旭日大教会長の岡本善弘氏が考古学・民俗学専攻の研究室を訪問された。岡本氏の話によれば、乙木町所在の「東乗鞍古墳」は、昭和27年頃信者から「お供え」されたもので、大教会が竹林の管理をしながら、毎年春秋に慰霊祭を行ってきた。ところが、今年の春、石室入り口部分が崩落する事件があり、その後、天理市、天理大学に対して、同古墳の調査研究と活用を求める働きかけを続けているとのことだった。天理大学の研究者・学生に「東乗鞍古墳」を研究フィールドとして、また一般の方々の学習の場、山の辺の道を往来する人たちの観光ポイントとして活用していただきたいが、どのように進めればいいのかと、熱意を込めて仰るのだ。

東乗鞍古墳といえば、大学近郊に所在する杣之内古墳群を構成する主要古墳の一つで、知る人ぞ知る、全国的に著名な古墳と言ってよい。石上神宮からハイキングコースの山の辺の道を南に歩き、乙木町の夜都岐神社のすぐ手前、右側の田んぼを挟んだ竹藪が古墳の場所、かつては、通路のあぜ道に古墳を示す簡単な目印も立てられていた（今はない）。竹藪に覆われた墳丘の南側面には、横穴式石室が開口していて、ハイキングの寄り道に石室の中を見学することもできた。石室内は、阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が土砂に埋もれて保存され、その手前には、別の石棺の底石が残っている。石室内は盗掘を受けていて、甲冑や馬具の部品が出土したという記録があるが、現在は所在が不明になっている。石室や石棺の特徴から、古墳が築造されたのは古墳時代後期前半（6世紀前半）と見られる。

天理大学では、2011年、附属天理参考館、天理市文化財課等の有志が加わる「杣之内古墳群研究会」を立ち上げ、大学周辺の古墳についての調査や基礎的検討を行い、2014年、その成果を『杣之内古墳群の研究』として刊行したところであった。その中でも、東乗鞍古墳は重要古墳として取り上げられ、調査研究が十分ではないとして、今後の基礎的な現地調査の必要性が指摘されていた。すなわち、古墳の測量図も、1m間隔の等高線を用いた精度の低いものしかなく、公表された石室の実測図も不完全に終わっている。1981年、親里ホッケー場の建設に伴い、榎原考古学研究所が墳丘の西側で発掘を行い、周濠の一部を確認しているが、墳丘の発掘調査はこれまで全く行われていない。

また2014年、天理大学と天理市が包括的連携協定を締結したのを受け、考古学・民俗学専攻では、これまで岐阜県で行っていた「考古学実習」による発掘調査を、天理市内で行えないか、適当な実習現場を求めて、天理市文化財課に相談を持ちかけていたところでもあった。このような経緯もあり、古墳地権者の大教会長からの申し出は、考古学・民俗学専攻としては、有り難い機会と思われた。そこで、秋の慰霊祭に合わせて、2016年10月5日、旭日大教会、天理市教育委員会文化財課、天理



写真1 慰霊祭を終えた石室入り口の様子

大学考古学・民俗学専攻の三者が現地での協議を行うことになった。現地では石室内の土砂崩落状況を改めて検討した結果、抜本的な解決

策を緊急に施すことは難しいと判断され、危険防止のため、入り口を竹格子で塞いで立ち入り禁止とした応急措置を当面維持することが確認された。そのうえで、並河健天理市長も膝を交え、将来的な古墳の保存活用をめざし、天理市と天理大学が協働で学術的な調査を行うという方向性が話し合われた。

翌2017年5月には、天理市教育委員会と天理大学文学部が「天理市内埋蔵文化財の調査・研究に関する覚書」を交わし、天理市文化財課と天理大学考古学・民俗学専攻が共同で同古墳の発掘調査を実施する枠組も整備された。さらに県の指導もあり、調査主体を天理市教育委員会として、文化財保護法による書類の作成や手続きなどは天理市が担当し、現地調査と事後作業は天理大学が行うという体制も整った。現地への基準杭の設置も夏前には完了した。

こうした諸般の準備を経て、東乗鞍古墳の発掘調査プロジェクトが開始し、2018年2月12日～24日、いよいよ現地調査が実施される運びとなった。県に提出した調査計画書に従って、古墳前方



写真2 考古学実習による発掘調査風景

部の西側斜面から周濠にかけての部分に、細長い調査区を設定したのだが、まず立ちだかかったのが墳丘を覆う竹藪で、まさに「森に生きる」と似た作業を実践しなければならない。聳え立つ竹を一本一本、手作業で根元から切り倒し、根を掘り起こすのは、大変手強く根気が必要な作業だが、最初は戸惑っていた学生たちも次第に慣れてくる。竹との格闘のあとは、本格的な発掘調査となり、手分けをして掘り進めると、古墳時代の土器片などが次々と見つかるようになる。埴輪の出土は調査を通して小片1点だけだったが、これはこの古墳にとっては実は大きな発見だ。東乗鞍古墳ではこれまで埴輪片が全く採集されておらず、本当に存在しないのか、疑問に思われていたからだ。埴輪の年代は、その他の出土土器も含め、石室や石棺の年代と矛盾しないと思われた。

短期間の調査ながら、得られた成果は古墳の保存と活用にもつながる新知見を付け加える貴重なものだったが、筆者としては、このプロジェクトにはそれ以上の意義と可能性があると考えている。「地域の自治体と大学が協働で発掘調査を行っているのは大変素晴らしい、是非、全国の人々に大いに宣伝してください」と話したのは、2月に現場を視察した文化庁の調査官だったが、加えて、地権者の大教会長の熱意と教会関係者の惜しみない協力があることが何よりも重要だ。調査に参加した学生や教員が合宿したのも旭日大教会の宿舎で、教会での合宿も学生たちには貴重な体験となった。また、調査期間中には、県内各機関の考古学関係者のほか、多数の大学教員が現場に足を運び、「大学の近くにこのような古墳があるのは知らなかった」「すぐ近くの古墳で実習ができるのは天理大学ならではの」「留学生が発掘に参加できたらいいですね」など、様々な感想や助言をいただいた。考古学の専門的な調査の枠を越え、さまざまな学びと交流の場として、是非、多くの人が参加できるようにプロジェクトに育ってほしいと願っている。